
天を駆ける艦

輝ける星光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天を駆ける艦

【Nコード】

N4798Q

【作者名】

輝ける星光

【あらすじ】

西暦5011年、地球。大戦争の影響で変革した世界を駆け巡る、一隻の高機動魔導飛翔艦があった。

(前書き)

こちらはリレー企画『輝ける星光』の関連作品です。
今作の作者はういいちです。

澄み渡った青空に流れるのは白い雲。風に乗って緩やかにたゆた
い、おぼろげに形を変えながら渡り行く。

その最上方では、眩いばかりの太陽が朗らかな輝きを放っている。
人手の及ばぬ天の高みで、全てへ平等に光を注ぐ。

空と対する眼下の地平もまた青い。何処までも広がる蒼海だ。陽
光を反射して煌き、寄せては引く波音が静かに大気を満たしている。
海の中には無数の魚影が走り、それを追うカモメの群が海面すれす
れに白い帯を作っていた。

天と地に近しくも異なる青を敷き、世界は遠く彼方まで続いてい
く。澄明な空海を穏やかな風が撫で、諸々を安寧の色に染め上げる。
大自然のパノラマは、ゆったりとした時間の中で永遠とも思える営
みを繋げ見せた。

そんな世界の只中を、巨大な剣が重音唸らせ轟き走る。白雲の群
を突き破り、音に比する速度で大空を渡っていく。通った後には碧
の粒子が軌跡を描き、鮮やかなる残滓を燻らせた。

その全長にして136m、全幅にいたるは37m。降り注ぐ陽光
を反射する白亜の偉容は、天空に浮かぶ巨大な剣そのもの。クレイ
モアと呼ばれる巨剣を遥かに大きくしたような外観の、それが高
機動魔導飛翔艦アストライアである。

鋭き切っ先は艦首を務め、長大な刀身は艦体、左右へ突き出した
主翼は鍰へ位置し、グリップ部分に主要機関区である動力系統を設
ける。平たく切り詰められた柄頭に推進装置である大出力スラスタ
ーを擁し、碧に輝く魔力の光を放出していた。

重厚たる刃に類する艦体中程、剣身中間部となる其処に艦橋があ
る。特殊強化製の耐衝撃仕様硝子と、偏光シールドに護られた発令
所。動力部が心臓ならば、艦の頭脳と呼べる最重要区画だ。

その内部には座り心地の良さそうな椅子が扇形に配され、それぞ

れが硝子側へ向かい設置された機器に面する。その背凭れから線を引きたら全てが交わるだろう中央に、幾許かせり上がる壇域があった。置かれているのは機能的な柔椅子。今これに座っているのは年端もいかない少年が一人。

蒼い髪を首に掛かる辺りで切り揃えた、随分と可愛らしい少年である。肌は白磁のように白く、滑らかで、幼さ故か全体に華奢だ。目が大きく鼻は高い、ともすれば少女とも思える。

年齢は10歳そこそこ。充分に若く頼りなげだが、理知的な面立ちと堂々たる雰囲気、気の強さや心の堅固さ、誇り高さを感じさせた。

蒼海を映し込んだようなコバルトブルーの瞳には、知性の輝きが煌いている。それと共に飽くなき探究心、無限の好奇心が眩い光を放ち見せた。

今は亡きアルハルト皇国の知られざる皇子、ノイウエル・フォン・アルハルト。それが少年の名前だった。

白と青を基調とするローブ似のゆったりとした着衣を纏い、ノイウエルは大いなる遺跡艦の最高権威者、艦長を示す玉座に座っている。

「してリリナよ。本艦は今、どの辺りを飛んでいるのだ？」

「はい。現在は北大陸アルコノスト南東部海上を、東大陸カスミガへ向けて航行中です」

ノイウエルの問いに淀みなく答える声。その持ち主は、少年の隣に整然と佇んでいた。

白い髪を首筋まで伸ばす、メイド服を着た若い女性である。顔の作りは整っているが無機的で色がなく、感情の揺らぎも感じられない。仮面のような無表情や、隙がなく落ち着いた姿から、伶俐な女性秘書という印象を与える。

ノイウエルに仕える忠実な従者、リリナ・レイツェン。彼女は10歳以上も年下の主君に、礼節を以って応じていた。子供だからと軽んじる様子は皆無。表情こそ無味乾燥であるが、殷懃な彼女の態

度からはノイウェルへの強い忠誠が窺える。

「そうか、じきにカスミガか。あの大陸は豊かな地だと聞く」

椅子に深く腰掛けながらも、ノイウェルはどこかソワソワしている。まだ見ぬ大地への期待に、これから待っているだろう冒険の予感に、胸躍らせているのだ。少年は興奮の面持ちで、強化硝子越しに大海へ向ける瞳を目一杯輝かせていた。

「はい。四季での格差はありますが気候は比較的安定しており、動植物の品種も多様です。大きな事件事故も近年聞きませんので、極めて過ごし易いかと」

その隣では相変わらず顔色一つ変えないで、リリナが淡々と目的地の情報を述べていく。手元にはなんの資料もない。記憶の中から必要なものを取り出しているのだが、非常に滑らかだ。起伏のない平淡な声だが、不思議と耳に心地良い。

「折角の異国なのだ、母上も御連れしたかった」

不意に、ノイウェルの顔へ寂しげな影が差した。年相応の子供らしい、人恋しさと心許無さが覗く。

それを敏感に察知して、リリナは即座にフォローを返す。

「ノイウェル様の世界を巡りたいという願い、これを誰より推しておられるのは他ならぬヒカル様です。あの方はノイウェル様が気兼ねなく自由に羽ばたけるよう、御自身は彼の国へ残ることを望まれました。ヒカル様の御身を案じるノイウェル様が、冒険に注力出来ぬ事を良しとせぬ故にです」

「うむ、分かっておる。母上の御心遣い、余は決して無駄になどせぬぞ。如何なる秘境や魔境、危地や危難、謎と神秘に挑み続けよう。この世界を冒険し尽くす、それこそが余の人生を懸けるに足る夢なのだから」

椅子から降り、拳を握り、ノイウェルは大空を仰いで宣言した。

まだ幼い若輩の身ながら、胸に燃やす熱意と決意は本物である。

父皇の不義によって生を受けたノイウェルは、その存在を疎まれた為に長らく幽閉同然の生活を強いられてきた。世界の広さを知る

事もなく、自らの生に意味を見出せず無下に過ごす日々。それは多感な少年の心に強烈な痛手を負わせ、癒せぬ渴きを宿らせる。

閉じられた領域から解放された時、その心身は強烈な反動に襲われた。即ち、遠大なる世界への挑戦。見知らぬ全てを己が目で見、肌で感じて、悉くを暴き晒し知り尽くしたいという衝動。その揺ぎ無い一心は凄まじい食欲さを持ち、留まり得ぬ渴望が少年を衝き動かす。

そんなノイウェルを最も身近で見守ってきたからこそ、彼の内心を誰よりも良く知る実母は、旅立ちを望んだのだ。母に背を押されて広大な世界へと踏み出したノイウェルは、古代の飛翔艦を手にしたことで、願望と夢想を実現させる手段を得た。抑えきれない好奇心と冒険心は少年に不撓不屈の覚悟を決めさせ、果てしない活動の道へと飛び立たせる。

「余はこの世界を隅々まで駆け抜けてみせようぞ！」

高らかに謳い上げるノイウェルを、リリナは僅かに目を細め眺めていた。殆ど変化がない顔のため分かり難いが、心なしか微笑んでいるように感じられる。

一途な夢に邁進する少年へ従者が注ぐ紫瞳は、真なる主へ捧げる忠節と、柔らかな優しさを含む。

「その気概はけっこうなのですが。ノイウェル様、まずは当面の問題がございます」

小さな緩みは知らぬ間に消え、リリナの顔にはクールさが戻っていた。そのまま投げられる抑揚のない言葉に、ノイウェルは振り返り小首を傾げる。

「問題とはなんだ？」

「はい。端的に申し上げて、人員不足です」

「ふむ、確かに。これだけ広い艦内に、余とリリナだけというのは寂しい気もする」

「気分の話だけではありません。現実的に考えて、今のままでは何もやれはしないでしょう」

責めるでもなく一定の声調で語るリリナは、冷静であるからこそ発言が重々しい。特に力が入っているわけでもなく、語気も荒いではないのに、樂觀できぬ状況なのだと伝わるものがある。

ノイウェルも正しくそれを感じ取り、我知らぬまま息を飲んでいった。

「今でこそ自動操縦で艦の運行を行っていますが、何時までもこのままではいられません。いざという時、的確な運用を行える人材は必要不可欠です。魔導艦の操縦経験者を見付けて下さい」

「うむ、操舵士が居らぬでは移動もままならぬな」

「それから目的地までの最適経路や運行日程を割り出し、状況に応じて操舵士をサポートする航海士も必要です」

「成る程な」

「そして艦の整備や、主要動力炉の調整が出来るエンジニアも必須ですね。古代技術や魔術システムに詳しい機関士は何名居ても困りません」

「そうか。では、そちらもどうかして……」

「冒険をする以上、ノイウェル様と私だけではどう考えても荷が勝ちすぎましょう。もっと多くの仲間を集めるべきです。同じ様に世界を冒険したいと思っており、尚且つ信頼の置ける同志を集めて下さい」

「そうだな。仲間は多い方が良い。是非、我が艦へ招き入れたいものだ」

「仲間が増えれば食事が必要になります。コックに成りえる者も乗せることを提案します。それから救護班も居てもらわねばなりません。発見した遺物の調査を行う研究員も欲しいところです。幸いにして必要な設備などは艦内にあるので、まずは人員を集めましょう」

「う、うむ」

「それから掃除係、衛生官も忘れてはいけません。艦長の補佐や代理を行う要職、副艦長も見出さねばならないでしょう」

「副艦長はリリナがやれば良いのではないか？」

「私は艦長の、つまりノイウエル様の護衛です。アストライアの行動決定に口出しするつもりはありません」

口に出した疑問は間髪いれず一蹴された。ハキハキとした物言いに、感情の差し挟まれぬ声は、例え発言者にそのような意図がなくとも、矢継ぎ早に聞かされる側を圧倒する。

次々繰り出される注文に、ノイウエルは早くも頭が追いつかなくなりつつあった。若干混乱し、目まで回ってくるような錯覚を覚えている。

「とにかく乗組員を集める事が先決です。これから方々の国や街を巡り、仲間を見付けていきましょう。御安心下さい、ノイウエル様。この艦は目立ちます。興味を抱いた者達は自ずと集まってくるでしょう」

「余もアストライアを見た時は感動した。冒険者ならば、心震わされずにはおられまいな」

リリナの意見に得意気な顔をして、ノイウエルは大きく何度も頷いた。艦の事を褒められると、我が事のように感じるのは、それだけ愛着があるからだろう。

「ノイウエル様、そろそろ東大陸が見えてまいります」

「おお、そうか！」

従者の声に反応して、幼い艦長は開けた展望へと視線を投げた。

澄み渡る空と海の続く景色に、緑溢れる大地が姿を現しつつある。見下ろす視界に輪郭が、次いで街と思しき開けた区画が明瞭に確認出来ていく。新たな大陸への訪れを確かに感じながら、ノイウエルは高鳴る鼓動を抑えられない。知らず知らずのうちに顔は笑顔に、目には期待と喜びが溢れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4798q/>

天を駆ける艦

2011年1月29日00時55分発行